

## 『狭き門』初出テキストの校正刷

吉井, 亮雄  
九州大学大学院人文科学研究院教授

<https://doi.org/10.15017/8786>

---

出版情報 : Stella. 22, pp.139-148, 2003-12-26. 九州大学フランス語フランス文学研究会  
バージョン :  
権利関係 :

# 『狭き門』初出テキストの校正刷

吉井亮雄

『狭き門』がフランス文学史上に確固たる地位を占めるのは、もちろんまずは芸術作品としての完成度の高さによるが、その出版をめぐる事情もまた軽視することはできまい。ジッドやシュランベルジェ、リュイテルス、ドルーアンら、志を同じくする作家たちが共同で編集にたずさわり、少なくとも兩次大戦間のフランス文学を主導した月刊誌「新フランス評論」の創刊を飾ったことも与って『狭き門』は記念碑的な作品としての栄誉を獲得したのである。

ジッド自身の証言によれば物語の着想はるか 1891 年頃にまでさかのぼるが、実際に執筆が開始されたのはそれから 15 年近くを経た 1905 年。だが以後の進展もけっして捗々しいものではなく、「この惨めな本」がようやく本格的に動き出すには、1907 年 6 月、「4 度目のまったく一からの書き直し」<sup>1)</sup>を待たねばならない。ついで同年 11 月からは執筆の進行にあわせ順次自筆稿をもとに 4 部のタイプ稿が作られ、これをもちいて推敲が重ねられた<sup>2)</sup>。その後もなお少なからぬ曲折を経ながら、ついに脱稿に至るのは翌 1908 年の 10 月後半ないし 11 月初めのことであった。

「新フランス評論」の印刷はベルギー・ブリュージュのサント＝カトリーヌ印刷所が請け負い、1908 年の暮から翌年初頭にかけて、他の創刊号掲載予定テキストとともに『狭き門』の組版作業が開始される。同時にジッドはこの新作の単行出版を、『ユリアンの旅・パリュード』第 2 版 (1896 年) 以降、自作の大半を刊行してきたメルキュール・ド・フランスに委ね、16 折小型の豪華紙初版と 12 折普及版との 2 種類の版本を準備する。印刷部数などにかんし途中若干の逡巡は見られたものの、満を持しての出版であったと言えよう。

ところで、現存が確認された『狭き門』の自筆稿類は量的に豊富と呼ぶにはほど遠く、作品全体をカバーする完全稿としてはパリ国立図書館現蔵の自筆修正入りタイプ稿しか残されていない<sup>3)</sup>。そういった物理的制約が禍して執筆の

過程を追跡するのは容易な仕事ではなく、生成論的な観点からは研究者泣かせの作品とも言える。出版に向けた準備作業においても事情は変わらない。最終段階でのテキスト点検の委細を伝える実証資料ということになればまずは校正刷だが、これについても現存の確認されていたのはただひとつ、パリ大学附属ジャック・ドゥーゼ文庫所蔵の初版初校だけであった<sup>4)</sup>。メルキュール・ド・フランス社向けタイプ稿の最終状態を写す組版という意味では貴重な資料であるが、そのものじたいは実際の印刷に使用された揃いではなく、鉛筆書きの2つの欄外メモを除けば、自筆の修正はいっさい施されていない。必然的に情報の不足は質量両面いかんともしがたく、具体的な校正作業にかんしては少なからぬ部分が不明のままだったのである。しかしながら最近になって、新たな情報をもたらすもうひとつ別の校正刷の現存が確認された。幸いにも筆者はこれを子細に調査する機会をえたので、とりあえずの報告として本稿では、関連書簡等を参照しつつ、「新フランス評論」連載の初出テキストを中心に校正作業の工程を検証・概観する。

\*

問題の校正刷は2000年4月ベルギー・ブリュッセルの競売ではじめて公に姿を見せたものだが、出品目録には「初版273頁のうち196頁分に相当する自筆修正入り<sup>フラカール</sup>棒組」と記されるだけで版の特定すら欠けていたためか、結局のところ落札はされず、その後しばらくして競売を主催した古書店から現在の所有者に直接売却された。当時はまだバラバラの紙片の束であったが、今は一冊の本のかたちに装丁されている。

まずは組版や全体の構成について述べておこう——。保存されていた校正刷は、縦325×横173ミリ大の紙片、計69枚からなる。版面は中央部の縦210×横85ミリを占め、1枚につき45行の割合で活字が組まれている。1枚目の右下に植字された「rev. franç.」という備忘によるまでもなく、任意の箇所の組版を「新フランス評論」掲載テキストの対応部分と並べてみれば、これが雑誌初出用の棒組初校であったことは一目にして瞭然である。

だが全体の構成からいえばコーパスは大きく3つに分かれ（順に33枚、19枚、17枚）、それぞれ版面右下に1から始まる通し番号が打たれている。いま仮

にこれらを「区分A, B, C」と呼ぶならば、区分Aは「新フランス評論」初回掲載分を、また区分B・Cはおのおの第2回掲載分の前後半を収める（ただし最後の5頁分はおそらく紛失により欠落）。区分Aの冒頭にはジッドの筆で「この校正刷を再校とともに〔当方に〕戻されたし」と、サント＝カトリーヌ印刷所への要望が記され、いっぽう区分Bの冒頭にはフラマン語で「新たな校正刷〔を〕今日〔中に〕nieuwe proeven / vandaag」と、植字工に向けた再校組版の指示が印刷所によって書き込まれている。また区分Cの1枚目は、区分Bの末尾24行を再録するかたちで実際の公刊テキストと同じ箇所から始まり、しかもこの時点ですでに「175」というノンブルが右肩に付されている。以上を考え合わせれば、3つの区分が組版作業の工程でおのおの別個に取り扱われたことは疑いを容れない。ちなみに組版テキストじたいは、先に言及したドゥーセ文庫現蔵の初版初校とのあいだに微細な異同を見せ、雑誌用と初版用とでは印刷所に渡ったタイプ稿の最終状態が完全に同一だったわけではないことを窺わせる<sup>5)</sup>。

つぎは自筆による修正について——。細かな内容上の検討は他稿にゆずるとして、ここでは区分ごとの様態・方法をごく簡略に述べる。まず校正刷全体を見わたして直ちに気がつくのは、実質的な手直しが施されたのは区分Bまでであって——とはいえその多くも、単語レベルでの小規模な削除や代替、あるいは組版にかんする各種の指示などであるが——、区分Cにおいては特定の1枚にかぎり数カ所で誤植の訂正と句読法の変更がなされているだけで、それ以外は手つかずの状態だという点である。しかも区分A・Bの各紙片には、植字工の指紋をはじめ、印刷インクによる軽度の汚れが認められるのにたいし、区分Cの場合はそういった痕跡が皆無である。この部分については実際の作業に使用された棒組でないことの明白な証左といえよう。いっぽう区分A・Bのあいだでは、黒色インクをもちいたジッドの修正方法じたいにこれと目立った違いはないが、注目に値するのは、区分Aの書き込みがすべてジッド自身の筆によるのにたいし、区分Bには少数ながら別人物の手になるものが混じっていることだ。筆跡や校正記号の特徴から見て、もうひとりの校正者がシュランベルジェであるのは間違いのない。この「新フランス評論」の盟友による書き込みはほとんどが誤植の訂正にとどまるが、なかには作者の指示にもとづくのか、あるいは彼自らの判断によるのか、いずれとも決しがたいものもある（た

たとえば「pauvre ami」という呼びかけを「pauvre frère」に替える、など。

さて以上の概観をふまえて今度は、棒組校正刷の各区分と、ジッド＝シュランベルジェ往復書簡集が折々に言及する校正作業との関係を、時間の流れに沿って追跡・確定する。比較照合を容易にするために、まずは備忘をかねて校正刷と公刊テキストとの対応表を掲げておこう――

校正刷	「新フランス評論」初出テキスト
区分A 33枚	第1号掲載分の全部(43-90頁)
区分B 19枚	第2号掲載分の前半(144-175頁)
区分C 17枚	第2号掲載分の後半(175-200頁)。冒頭24行は区分B末尾と重複、また最終5頁分(200-205頁)は欠落

周知のように「新フランス評論」は毎月1日の刊行を謳った月刊誌だが、第1号(1909年2月)、第2号(同3月)ともに前月の末には遅滞なく無事出来している<sup>6)</sup>。以下ではジッド＝シュランベルジェ往復書簡集から関連証言を順次拾い出してゆくが、この時期のシュランベルジェ書簡はほとんど保存されており、結果的に証言はジッドのものが大半を占める(よって断りのないかぎり出所はすべてジッド書簡。また内容の提示には直接の引用とパラフレーズとを併用する)。ではさっそく1月の記述から――

1月3日:『『狭き門』の校正刷は2組、しかも再校まで(deux épreuves, et deux séries d'épreuves)ということをお願いしたい」[146]

1月初め:「印刷所を急かされたし。さもなくば私の『狭き門』のために雑誌の出来が遅れてしまいます。修正すべき箇所があるのは間違いなし。校正刷はなんとしても2組必要です。とにかく急かされたし」[147]

1月18日:「多忙のため今朝はアサス通り〔のシュランベルジェ宅。「新フランス評論」の編集事務所を兼ねた〕に立ち寄りそうもなし。校正していただきありがとうございます!」[149]

初めの2つの記述は、いうまでもなく初校・区分Aにかんするもの。いっぽう18日の記述は、雑誌刊出まで残りわずか10日ほどであることから、再校を指

しているのは間違いあるまい。したがって、現存の棒組初校をもちいたジッドの校正作業は遅くとも1月半ばには終了し<sup>7)</sup>、つづいて再校の出来後、間をおかずシュランベルジェが、おそらくは両校を照合しつつ、最終点検をおこなったということになる。ちなみにジッド自身が再校を見たか否かは不明であるが、棒組初校の最終状態と雑誌掲載テキストとの差異がほとんど認められないこと、すなわち再校での新たな修正が皆無に近いことからすれば、前者の蓋然性はむしろ小さいのではあるまいか。

2月に入ると、書簡の話題はおのずから「新フランス評論」第2回掲載分へと移行する――

2月1日：「『狭き門』の校正刷を落掌」。つづいて翌日：「この校正刷には私の原稿の半分しか入っていません」[154-155]

2月13日：ルーアンからの発信。4日ほどキュヴェルヴィルに滞在することを通知したうえで、「第2部分の終わり (la fin de la seconde tranche) の校正刷を受け取りしだい、その1組をリュイテルスに、2組目を私に送られたし。また〔ふたりが作業を終えたのち〕すべての修正をひとつの校正刷にまとめていただければありがたい」。時間のない場合には満腔の信頼をもってシュランベルジェとリュイテルスに校正を委ねる、との旨。しかしながら、おそらくいくつか手直しすべきところがあるだろうから、可能ならば郵送を請う、とも。[163]

これらの記述は、区分A（およびその再校）の組版・校正が完了した後、第2回掲載分の初校が2つに分けて組まれた事実を改めて裏付ける。月初めにジッドが手にしたのは区分B、中旬に出来次第の郵送を請うている「第2部分の終わり」が区分Cであるのはもはや断るまでもない。さらに組版の工程について付言すれば、先述の区分C・第1紙片のノンプルは当然ながら先行部分の頁割りをうけての処置であること、同じく冒頭部の再録箇所では区分Bの自筆修正がすでに採られていることなどから、区分Cの出来は区分Bの印刷所戻し以後であったのが確実である。

後半部の校正にかんじジッドは13日付書簡で強い意欲を伝えているが、時間不足のためだろう、結局は次善策をとってシュランベルジェやリュイテルスらに実際の作業を委ね、自らはまず間違いなくテキストの見直しをおこなっていない（後掲の3月2日付書簡もそのことを濃厚に示唆する）。当該部分の現存

初校がほとんど未修正の状態であるのも、こうした事情とけっして無関係ではあるまい。また、同じ書簡でジッドが指示する「複数者の修正をひとつの校正刷にまとめる」という方法や、以後の作業実態を思えば、すでに言及した区分Bのシュランベルジェによる書き込みは、2組目の棒組を使ったリュイテルス（あるいはドルーアン）の修正を転記したものであった可能性も浮上してこよう。

上述のような準備作業をへて「第2部分」の刊出が間近にせまった2月25日の書簡では、『狭き門』の第3部分（la troisième partie）についてご提案いただいたいくつかの修正」[165]への謝辞が短く記されている。ジッドが指しているのは、まずなにより日付から見て、雑誌第3回掲載分の初校（3月初旬出来）ではありえない。時期的に該当しうるのは、2月20日に組版が完了したメルキュール・ド・フランスの初版初校しかないわけだが、その場合には、書簡の記述をどう解するか、という問題がただちに生じてこよう。この点にかんしては、雑誌の初校を待つあいだに、時間のロスを減ずる目的でシュランベルジェがあらかじめ単行本の校正刷をもちいて最終部分を点検しておいた、そう考えるのが最も無理のない推論なのではあるまいか<sup>8)</sup>。

月が変わり3月に入ると、やがて話題の中心は現存初校には欠けている第3回掲載分へと移ってゆくが、次の書簡には前回掲載分への遡及的な記述も併せて認められる――

3月2日：ただちに直して返送するので、なんとしても『狭き門』Ⅲの校正刷を送っていただきたい。「Ⅱ」を再読し終わって、貴兄たちの見事な修正にもかかわらず、行アキの不備（とりわけ179頁下部で「第6章」の指示が欠落）や、私のほうで手直しすべきだった箇所などがまだいくつか目にとまる。だからサント＝カトリーヌ印刷所を急かされたし。これにつづいて、「ドルーアンとリュイテルスが明言するところでは、貴兄は、貴兄たちによる修正の入った校正刷（第2部分の後半 2<sup>de</sup> partie de la 2<sup>de</sup> partie）を手元に置いておられたとのこと。ただちにそれを私宛（ローマ局留）に送っていただけないだろうか。だがそうすると万事複雑になってしまい、私が旅立たないほうがよいということになってしまうのだが！」[168-169]

このように第2回掲載分が大いに不満の残るものだっただけに、ジッドとしては来る最終回はなんとしても万全を期したいところである。なお、シュランベルジェが手元に置いていた「修正入りの第2部分後半」とは、いうまでもなく、

2組刷られた棒組のうち現存の区分Cとは別の揃いのことを指すが、事後になってこれを自分に送れとはいかなる意味か。依頼どおりに事が運んだか否かは不詳だが、発言の意図じたいはおそらく次のようなものだった。すなわち、ジッドはしばらく前から初版初校についても校正作業を開始していたが、そのさいの課題のひとつは雑誌初出テキストとの照合にあった。だが第2部分後半については自らは校正に関与していなかったために、シュランベルジェらによる修正箇所を即座には特定しにくい。よって「貴兄たちによる修正の入った校正刷」を送られたし、と。

さて上記書簡が言及するように、ジッドは3月2日、「喜びに興奮ききってローマに向けて出立」<sup>9)</sup>。以後の書簡はいずれもかの地からの発信となる——

3月4日：「小説の第3部分の校正刷 (épreuves de troisième partie roman) を送っていただく時間がない場合にそなえ、私のほうから3、4日後に本の校正刷 (les épreuves du livre) をお送りする。これは貴兄に再読をお願いするためではなく (点検していただけるならば再校で願いたし)、私がそこに書き込む指示や修正をすべて雑誌のテキストに転写していただくためのもの」[170-171]

3月6日：このところ「私の校正刷」の見直しにかりきりだった。その修正校を同封するが、「もし校正刷を私に送る時間がないならば、この校正刷に書き込んだ修正をそちらのほうに綿密に転写していただきたい。[...] 私がした数カ所の削除、とくに第8章冒頭部の削除は十分に評価していただけるものと思う」。また、「とりわけ面倒なのはアリサの日記の頁割りでしょう。よって再校は不可欠なわけですが、そうすると今度はそれを私に送っていただくのがまずは無理ということになってしまいます。貴兄のほうで注意万端ぬかりなくと願えるでしょうか」。第2号掲載分のさまざまな不備が「この数日、私の心を深く沈ませている」だけに、くれぐれもよろしく。近日中に「小型本の冒頭部の校正刷をお送りするので、それを同封の校正刷と一緒にしていただきたい。そのうえですべてをメッサン [メルキュール・ド・フランスの印刷所ビュシエールのパリ代理人] に届け、再校を2部、初校戻しで要求されたい」[171-172]

これら2通のうち6日付にたいするシュランベルジェの返信 (2日分の記述を合わせて3月10日に投函) は保存されている。引用が続くが、同一の話題なのでこの返信もひとまとめに提示しておく——

3月9日：「校正刷の修正はすべて厳密に転写しますので、ご心配なく。貴兄の修正はすばらしい。テキストの贅肉をみごとに削ぎ落としています」。第2号掲載分について

は悩むなかれ。だれもそんな細部には目をとめぬし、たとえ目をとめる者があったにせよ、非難されるべきは我ら「編集者トリオ」のほうなり。

3月10日：「修正はすべて転写。〔…〕今夜ヴェルベック〔サント＝カトリーヌ印刷所社主〕に一括送付し再校を要求する所存」。さらに本の校正刷のほうについては、ご指示どおり冒頭部の到着をまってメッサンに戻す、と。[176-177]

それでは一連の記述をふりかえってみよう。まず4日付書簡において、「小説の第3部分の校正刷」が「新フランス評論」第3回掲載分の棒組を、またジッドが手元において修正中の「本の校正刷」がメルキュール・ド・フランスの初版初校を指すことはもはや言わずもがな。これに準じ6日付書簡についても、彼がシュランベルジェらに作業代行を依頼しているのが雑誌用棒組、いっぽう「私の校正刷」「小型本の校正刷」と呼ぶのが初版初校であるのは容易に判別できる。さらにシュランベルジェの返信が証言するパリでの作業をふまえて校正の方法・工程を確認すれば、それはおおむね以下のようなものであった。まず、初版初校をローマに持参していたジッドはいまだ一度も組版テキストの見直しをしていなかった最終部分を中心に校正をおこなう。雑誌初校についても実物の点検を望んだが、時間不足のため結局のところ初版初校（冒頭部を除く）をパリに送り、その最終部分の修正箇所を前者に転記するように依頼する。シュランベルジェらはこの指示を履行し、雑誌初校の作業はひとまず完了。いっぽう初版初校のほうは、残る冒頭部のパリ到着をまって印刷所に戻す手はずが整えられたのである。

6日付書簡の具体的記述にかんする若干のコメント——。まず「とりわけ面倒なのはアリサの日記の頁割り」とあるのは、該当部分での日付・曜日や行アキの頻出を思えば、なるほどもっともなことと頷けよう。またジッドがおこなった最終部分の「数カ所の削除」については、ドーセ文庫現蔵の未修正初版初校と雑誌公刊テキストとの照合によって特定可能であるが、ここではジッドがとりわけその意義を強調する「第8章冒頭部の削除」、すなわち雑誌第3回掲載分冒頭部の削除に触れておこう。『狭き門』第8章は「しかしながら私はふたたびアリサに会うことになった……」と、静謐な書き出しのもとに始まるが、校正段階まではその前に、アリサとの別離後「きわめて愚かしい遊蕩にふけた」ジェロームの精神的混沌を回想する3つの段落が存在していたのである。

それによって物語の結末が決定稿とは微妙に異なる色彩を帯びていたことは否めない。

3段落の削除については、すでに半世紀近く前のものだが、文学ジャーナリストのピエール・マザルスによる興味深い報告がある。すなわちマザルスは、「新フランス評論」創刊から数えてちょうど50年が、またジッド没後からは丸8年が経過した1959年2月21日の「ル・フィガロ・リテレール」紙上で、雑誌創刊時の事情に触れたのち、シュランベルジェが保存していたという校正刷により削除箇所を全文を活字化し、また例証をかねて冒頭の数行は写真複製しているのである（ただしマザルスはこの校正刷を「再校」と記すが、あきらかに「棒組初校」の誤り）。削除・修正は疑いの余地なくシュランベルジェの筆跡によるもので、先に引いたジッド宛返信の記述内容を裏付ける<sup>10)</sup>。この第3回掲載分初校のその後の行方は残念ながら不詳であるが、現存初校に同部分が欠けているのも、あるいは著者や編集者が入り交じった複雑な校正方法となんらかの繋がりがあるのかも知れない。

かくのごとき経緯をへて、やがて書簡の用件はもっぱら豪華紙初版および普及版の並行出版に向けた準備作業（実際にはそれまでにおこなっていた修正の転写・再録と事後の点検とが大半を占める）が中心となり、雑誌初出テキストのほうはいっさい話題に上らなくなる。それにともない本稿もおのずと擱筆の時を迎えるわけだが、いくつか不明点は残しながらも、ここに至る校正作業の大まかな工程については実証的に確定しえたと考える。今後望まれるのは個々の修正の細かな内容検討であろうが、すでに断ったようにその課題は他稿にゆずることとしたい。

## 註

- 1) André GIDE, *Journal 1887-1925*. Édition établie, présentée et annotée par Éric MARTY, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1966, p. 574.
- 2) Voir *ibid.*, p. 581.
- 3) Dactylogramme corrigé de *La Porte étroite* (154 ff.), Bibliothèque Nationale, N.a.f. 25174.
- 4) Épreuves mises en page de *La Porte étroite* (277 pp., ach. d'impr. 20 février

- 1909), Bibliothèque littéraire Jacques-Doucet, B-VI-58.
- 5) タイプ稿が4組作成されたことは先述のとおり。そのうちの2組が印刷所に渡ったわけだが、これらはいずれもパリ国立図書館現蔵の自筆修正入りタイプ稿とは別物で、そこには微細ではあるが、さらに新たな修正が施されている。一例を挙げれば、現存のタイプ稿はヒロインの名前をタイプ打ちの Gertrude から Alyssa に修正するとどまるが、「新フランス評論」の棒組初校、メルキユール・ド・フランスの初版初校はいずれも組版テキストの段階ですでに決定稿と同じ Alissa の綴りに変更している。さらに初版初校にかんしては、他の2つのテキストが一カ所だけ見落としている Gertrude も修正済みである。
  - 6) ジッドの2月2日付シュランベルジェ宛書簡の「ウージェーヌ・ルアールが自分用の1冊をまだ受け取っていないと苦情を言っていた」、およびシュランベルジェの3月6日付ジッド宛書簡の「雑誌は〔期日よりも〕1日早く出来た」という記述による (voir André GIDE – Jean SCHLUMBERGER, *Correspondance 1901-1950*. Édition établie, présentée et annotée par Pascal MERCIER et Peter FAWCETT, Paris : Gallimard, 1993, pp. 156 et 176)。なお以下の本文において同書簡集から訳出引用するさいには、そのページ数を [ ] 内に示す。
  - 7) ちなみに以後の作業形態から見て、シュランベルジェ、リュイテルス、ドルーアンのいずれかがもう1組の棒組初校をもちいてテキストの点検をおこない、その成果をジッドが現存の棒組に採録・転写した可能性は小さくない。
  - 8) ただし断るまでもないが、実際の作業に使われたのは、上述したドゥーセ文庫現蔵の未修正校正刷とは別の揃いということになる。
  - 9) Voir André GIDE, *Journal 1887-1925*, op. cit., p. 608.
  - 10) Voir Pierre MAZARS, «*La Nouvelle Revue Française* naissait il y a cinquante ans...», *Le Figaro littéraire*, 21 février 1959, p. 6. この削除された3段落は同年9月に刊出のメルキユール・ド・フランス版『狭き門』に付録として再録されたが、同版の「刊行者ノート」はシュランベルジェの保存していた校正刷そのものについてはただ「棒組」とだけ記している (voir André GIDE, *La Porte étroite*, Paris : Mercure de France, 1959, pp. 210-213)。